

写真を用いた自由連想ドローイング

東方 悠平[†]・伊崎 貴己^{††}

Free Association Drawing on Photograph

Yuhei HIGASHIKATA[†] and Takaki ISAKI^{††}

ABSTRACT

In the early 20th century, Surrealists used the unconscious as a cue to seek new artistic expression. In this study, referring to the "free association" and "drawing", the author used the method of drawing on what is associated with the photographs to create works that utilize the artist's unconscious. Through the making of two works, the author clarified the significance, potential, and problems of this method.

Key Words: *drawing, surrealism, automatism, photograph*

キーワード: ドローイング, シュルレアリスム, オートマティスム, 写真

1. はじめに

1.1 目的

芸術作品の面白さの一つに、鑑賞者に思いも寄らない想像の飛躍をもたらすことがあげられる。そういった作品を、作者はどのようにして作り出しているのだろうか。作品制作におけるきっかけは、さまざまに異なる。自身の内的な感情や持ち得る技術に依ったり、外的な条件として設定された締め切りや作品の展示場所、依頼先からの要望などに合わせたりすることが考えられる。本研究では、作者の内面に焦点を当てる。特に、作者自身も言語化や意識化することができていない無意識の領域に、大きな創造の可能性があると考える。

無意識からの創作を試みたことでは、シュルレアリスム¹⁾のオートマティスムが知られる。その指導者であるアンドレ・ブルトン(1896-1966)は、心理学者であるジークムント・フロイト(1856-1939)の、無意識という概念に大いに影響を受けた。中嶋²⁾は、シュルレアリストたちは「催眠やフロイトの自由連想といった臨床学的方法を、「無意識」を表出させ、未知の創造的力を引き出す芸術の手法に援用できる」と考えさまざまな創作上の試みを行った、と述べている。

本研究では、シュルレアリストたちの実践を手がかりに、写真を使った「自由連想ドローイング」³⁾手法を着想した。本手法を用いた作品制作によって、作者の無意識⁴⁾のクリエイティビティが発揮されることの意義と可能性について考察すると同時に、問題点を明らかにする。

1.2 背景

筆者には二つの制作習慣がある。一つは写真撮影である。普段生活を送っているなかで氣に

令和 4年 1月 25日 受付

[†] 感性デザイン学部・講師

^{††} 感性デザイン学部・卒業生

なった風景や物など、目に入ってきたものをスナップ写真のように撮っている。その場では何が気になったのかわからないものもあるが、後から写真を見直した際に、その時の感情を思い出したり、何かを連想したり、想像が膨らんだりすることに気がついた。自身の撮影した写真が、それだけで一枚のものとして独立するのではなく、日常の生活では意識していなかったイメージの広がりを与えてくれることに、興味を持った。

もう一つは、落書きである。特に学校の授業や何かの説明会など、自身が不特定多数の側にいる状況で、手元の紙にある余白へ何の気なしにペンを走らせ、目的の無い落書きをする。聞いている話の内容に関わるものもあるが、全く関係のないものも多い。描いたものから別のものがつながり、絵が次々に拡がっていくこともある。描いている時は、非常にリラックスした気持ちになることが多い。

上述した二つの制作方法は、どちらも作品を制作するためにわざわざ意気込むような行為ではないが、その発展性のある方法に可能性を感じた。それは、想定されたゴールに向かって作業のように進むのではなく、制作しながら考えたり気付いたりして発展していく行為だからである。このような取り組みの延長線上に思いもよらない作品が成立することが、筆者にとって望ましい制作スタイルであると考えた。そこで、二つを組み合わせた手法を、自由連想ドローイングと名付けた。撮影した写真に対して、そこから連想するさまざまな物事を具体的なイメージとして絵に起こし、写真の上へ自由にペンで描き込む手法である。ここでの「自由」とは、後述する自由連想法における自由の他に、ルールや規範、日常の常識から離れて自由に発想したり描いたりする、ということの意味している。

1.3 手法

自由連想ドローイングと名付けた手法を用いて、作品制作を行った。結果、普段の生活では意識することのない不思議な発想や自由なアイ

デアを用いて作品を制作することができた。一連の制作とそれに対する考察を通じて、本制作手法の意義や可能性、そして問題点を、明らかにする。

2. 先行研究

2.1 自由連想法

前述したように、シュルレアリスムの作家たちは、オートマティスムなどを用いて無意識を利用した創造力の表出方法を模索した。フロイトが提唱した自由連想法という精神分析の技法も、参照項の一つであった。フロイト(2007, p. 147)⁵⁾は、自由連想法を「批判的態度をすべて放棄するように教え、そうすることによって明るみに出されてくる思いつきを素材として、探し求める関連を発見するために利用される」とした。この手法は、催眠下になくとも患者の無意識の連想に触れられるというものであった。具体的な方法としては、まず患者をリラックスさせた状態にして言葉を提示する。それに対して患者は、連想した言葉を自由につないでいく。そこに患者の深層心理が表れてくるというものである。ここでは言葉から言葉、つまり「言葉→言葉」という連想がはたらいっている。

また、上田(2013)⁶⁾がブランディングの研究で扱っているように、自由連想法は近年、既存のイメージを拡張して新しいアイデアを発想するための方法として、さまざまな分野で応用されている。しかし、連想の結果がそのまま作品になるわけではない。特に言語から視覚表現へと接続するためには、何らかの仕掛けが必要である。その理由は、言葉を次々に発してつないでいく連想と、それをイメージに起こして作品化していくことには、乖離があるためである。

作品制作とは異なるが、古矢(1977)⁷⁾による研究では、言葉ではなく図形刺激による基礎的な自由連想の調査が行われた。使用した図形は単純なものに限られるが、図を見た瞬間に頭に浮かんだ言葉を書かせる実験を行っている。この

場合の連想は、「図→言葉」という順序でされている。結果、与えられる刺激が言語ではなく視覚的になったため、抽象的な連想がされにくく、具体的に目に見えるものの連想が多かったと述べている。しかし、型にはまらないユニークな連想が一定数見られたと、その可能性を認めている。

本研究で扱う自由連想ドローイングは、上述の実験よりも更に視覚表現へと近づく「図→図」という連想である。図のアウトプットにあたっては、次節で紹介するドローイング手法を利用した。

2.2 ドローイング

ドローイングとは、アートの分野ではエスキースやデッサンなどと同様に、下描きや習作、対象を理解したり記録したりするためのスケッチなどとして捉えられる、平面の線描である。

富田(2011, p. 50)⁸⁾は、ドローイングを、より大きな観点から捉える。オーストラリア北部のアーネムランドに住むアボリジニの人々の聖地で古くからある岩絵を調査した。その際に、岩絵には文化や政治など、時代を超えて彼らの社会を構成する要素の全てがあると考えた。岩絵を先史時代のドローイングと捉え、それを「ドローイングする行為者の思考やアクションも含めたきわめて動的な概念」と述べた。できあがったもの以上に、それに関わる物事や行為自体にも意味があると考えた。また、そういった考え方は、現代美術の文脈へと接続され、近年のドローイングを重要視する考え方につながっていると述べている。

上記についての具体例として、2020年の6月、東京都現代美術館で開催された「ドローイングの可能性」と題する展覧会がある。本展覧会でドローイングは、作品制作のための準備段階ではなく、そのものが一つの作品であるとされた。展覧会webサイト⁹⁾では、ドローイングを「揺らぎ、ときに途絶え、そして飛翔する思考や感覚の展開を克明に記すもの」としたり、「想像力による現実を超えるイメージ」を主題に持つものと

したりして、その可能性を高く評価した。

以上のことから、前項で言及した自由連想法によって現れる無意識を利用し、その飛躍的な連想の過程や行為を、ドローイングという技法で記録し可視化することは、適切であると思われる。

3. 作品制作

3.1 作品『日常と幻覚』概要と手法

先行研究を踏まえ、自由連想ドローイング手法を用いて作品制作と展示を行った(図1・2)。



図1 『日常と幻覚』から電柱の変圧器と宇宙飛行士



図2 『日常と幻覚』から雪景色と林と恐竜

概要は以下である。

- ・タイトル：『日常と幻覚』
- ・作者：伊崎貴己
- ・展示場所：八戸工業大学感性デザイン棟三階 KDプラザ
- ・展示期間：2020年7月29日-7月31日

・使用素材：油性ペン(黒)0.5-0.8mm、インクジェットプリンタ、A4コピー用紙 37枚

・制作手法：

1. PCのの写真フォルダにある、これまでに撮影した写真の中から、日常的な風景の写真を選び、A4のコピー用紙に印刷する
2. 写っている風景や物から、自由に物や光景を連想する
3. 写真の明るさや構図に合わせてペンの太さを選ぶ
4. 構造や形が分からないものは適宜調べながら、連想した物を線画で一気に描いていく
5. 一枚の壁面に並べて掲示する

3.2 作品『日常と幻覚』に対する考察

展示に際して、全部で37枚の自由連想ドローイングを制作した。写真上に描いたドローイングは、撮影している時に何かを思いついたのではなく、後から写真を見返して、写真に写る風景の明度や対象物から連想して描くものを決めた。

筆者が描いた37枚のドローイングを、その内容から以下のように分類した。

- ①建造物-3枚、②ロボットや機械-4枚、③骨や骨格-13枚、④人や人に類する生物-4枚、⑤恐竜-3枚、⑥その他の動物-6枚、⑦その他-4枚

前述したように、写真の上に描いたものは、元々想定していたものではなく、撮影した写真から連想して描いたものである。結果として、分類できるほど偏りがあったことに驚いた。単に白い紙に描く行為とは異なり、下地となった写真から連想してすぐに手が動いたため、何を描くか悩んで時間がかかるようなことはなかった。

自由連想の結果分析は、専門的な臨床心理学の知見が求められるため、本研究では言及しない。しかし、自身がそれほど意識していなかった興味関心が、自由連想ドローイングで顕在化し、意外な面白さを持った作品としてアウトプ

ットできたことに可能性を感じた。

3.3 作品『鯨骨の空』概要と手法

前作を踏まえ、同じく自由連想ドローイング手法を用いて、より展示空間を意識した作品制作を行った(図3・4)。



図3 『鯨骨の空』から、電線と鯨骨



図4 『鯨骨の空』展示風景

概要は以下である。

- ・タイトル：『鯨骨の空』
- ・作者：伊崎貴己
- ・展示場所：八戸工業大学一階学生ホール
- ・展示期間：2021年1月21日-1月22日
- ・使用素材：油性ペン(黒)0.5-0.8mm、油性ペン(銀)0.8mm、油性ペン(金)0.5mm、大判インクジェットプリンタ、ロール紙、木材
- ・制作手法：

1. PCの写真フォルダにある、これまでに撮影した写真の中から、日常的な風景の写真を3枚選び、大判プリンタを利用してA1サイズで印刷する
2. 写っている風景や物から、自由に物や光景を連想する
3. 写真の明るさや構図に合わせてペンの色と太さを選ぶ
4. 構造や形が分からないものは適宜調べながら、連想した物を線画で描いていく
5. 木材で床から立ち上がる支持体を制作する
6. 木の板面にドローイングを施した写真を貼り、位置を調整してインスタレーション作品として展示する

3.4 作品『鯨骨の空』に対する考察

前作『日常と幻覚』同様に、3枚の写真をプリントアウトし、その上に自由連想ドローイングを施した。描いたものは以下の三つである。

- ①鯨の骨、②古代魚の戦闘機、③木造船の骨組み

前作と同様に、描くもののイメージは、写真を見てすぐに浮かんだ。異なる点は、黒色の油性ペン一色で描いていたところへ、金色や銀色のペンを追加したことである。ただし、1枚に対して複数の色のペンを併用することはしていない。もう一つは、1枚あたりの大きさがA1サイズへと大きくなったことである。これまでは黒一色で描いていたため、ドローイングが見やすいように明るい写真を選んでいった。しかし、金色や銀色などの明るい色のペンを用いることで、暗い写真にも描くことができるようになった。同時に、連想の幅も広がった。また、写真のサイズを大きくしたことで、ドローイングのイメージをより細かく描き込んだり、抑揚をつけたりといった表現がしやすくなった。

一方で、サイズが大きくなることで、一枚にかける制作時間が長くなった。前作では、一枚

の制作に複数日かかることはなかったが、今作では、1日で完成したものはなかった。そのため、描いている途中で気持ちが変わり、違和感が出てくるようなことがあった。また、落書きの延長で連想したものを気軽にアウトプットする感覚は、薄くなっていった。加えて、小さなサイズの紙に描いた前作の制作行為をなぞり、下描きを大きく清書するような感覚も出てきてしまった。

結果として、一枚ずつの完成度は高まった。一枚の絵として、また全体の展示として見応えのあるものになった。しかし、スナップ写真やドローイングといったものが持っていた、良い意味での表現の軽さや、それによって無意識の思考過程を記録するような感覚は、希薄になった。サイズを大きくしたことは展示空間を意識してのことだったが、前作での制作の方が、できるだけ理性やルールといった意識から自由になるという、自由連想法に近い効果があった。

4. 結論

本研究では、作者の無意識を利用することで想像力を飛躍させ、日常と非日常を融合させた、超現実空間を魅力的に描く作品制作ができるのではないかと考えた。そのため、スナップ写真や落書きといった手法から、写真を用いた自由連想ドローイング手法へと発展させて、作品制作を行うことでその可能性と問題点を明らかにした。

シュルレアリスムの理論を踏まえ、自由連想法やドローイングといったものを自身の制作行為に落とし込むことで、思いもよらない不思議さと面白さを持った作品を制作することができた。鑑賞者からは、「不思議な光景を描いた作品に対して面白さを感じた」「見ているうちに自分自身が想像力を掻き立てられた」という感想を聞いた。作品における飛躍や思いも寄らない組み合わせが、鑑賞者に対してポジティブに作用した例を確認した。

一方で、自由連想法を用いた制作における問題点や留意事項も明らかになった。今回は、作品制作に重きを置いたため、自由連想法の厳密な適用は行っていない。また、今回連想されたイメージの偏りからは、作者がSFなどの映画やアニメの世界観から影響を受けていることも予想され、本当に無意識下での自由な連想を行うことができたのか、疑問が残る。また、作品制作における集中や没入などは、自由連想法において患者をリラックスした状態に置くこととの関連があると予想される。こういった心理学の専門分野からの知見が必要になってくる事項については、検証が不十分である。

加えて、落書きやドローイングという行為自体を捉え直す試みも必要である。それには、線を手がかりに研究を行う社会人類学者のティム・インゴルド(2017)¹⁰⁾による「語りの手段としてのドローイング」という考え方が重要な示唆を与えており、今後の研究課題としたい。例えば今回のように大型化した作品では、計画的に制作を進めなければならない状況になった。その際には、自由連想ドローイングの持つフレキシビリティや飛躍性が失われた。過程よりも完成を意識して作品を成立させようとする、いつの間にか作品を展示や空間に合わせるように制作してしまい、制作過程のみならず、完成した作品も窮屈な印象を受けた。

以上の問題点を解決するため、軽さを保ったまま作品化するという手法の開発が、今後の課題である。連想については、記号化されたイメージだけではなく、代わりに言葉や抽象的な図、アクションなどを用いることでも作品が成立する可能性がある。また大きさに関しては、小さなサイズの紙に素早く描いたものを、zineのように束ねて一冊の作品として鑑賞してもらうことや、小さなサイズに描いたものを、デジタル技術で拡大して出力したり、大きく投影したりすることも考えられる。もしくは、身体トレーニングや画材の工夫によって、大きなサイズの紙に素早くドローイングを描けるようにすることや、参考資料が無くともイメージしたものを描

けるようにすることも、解決のための可能性の一つである。本手法の更なる発展のために、今後の課題としたい。

参考文献

- 1) 監修 末永照和. 『20世紀の美術』. 美術出版社, 2000, p.63.
第一次世界大戦後にフランスで起こった芸術運動。ブルトンらが開発した自動記述法であるオートマティスムでは、夢や催眠術、心霊現象などを研究しながら、無意識の想像力による芸術表現の新しい可能性が追求された。
- 2) 中嶋泉. artscape Artwords. 「オートマティスム/オートマティズム」.
<https://artscape.jp/artword/index.php/%E3%82%AA%E3%83%BC%E3%83%88%E3%83%9E%E3%83%86%E3%82%A3%E3%82%B9%E3%83%A0%E3%83%9E%E3%83%86%E3%82%A3%E3%82%BA%E3%83%A0> (閲覧日: 2022.1.11)
- 3) 筆者による造語。
- 4) 本論における作品制作の源としての無意識は、フロイトの定義した厳密な無意識ではなく、前意識も含まれている。前意識について和田(2012, pp.40-41)は、「意識と無意識の間にあるのが「前意識」だとフロイトは定義しました。ふだんは自分でも気づかないけれども、ちょっとしたきっかけで意識レベルが上がってくるもの、それが「前意識」です」と解説した。無意識へ接近するためには、「前意識を観察したり、前意識から自由連想を深めていけば見えてくる」と述べている。無意識や自由連想法の定義を厳密に適用すると、作品制作プロセスを作家が独力で実施、展開することに支障をきたすため、本論ではあくまでも、精神分析学の知見を作品制作のために援用する、という立場をとる。
和田秀樹. 『心と向き合う臨床心理学』. 朝日新聞出版. 2012.
- 5) Freud, A. 訳 新宮一成. 「「精神分析」と「リビド理論」」『フロイト全集 18』. 岩波書店, 2007.
- 6) 上田雅夫. 「ブランド管理の目的に応じたブランド連想の収集-連想の収集法の特徴とその活用-」『行動計量学』. 日本行動計量学会, 第40巻第2号, 2013, p.121.
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jbhmk/40/2/40_115/_pdf
(閲覧日: 2022.1.11)
上田は、ブランディングのためのリサーチ手法として、自

- 由連想法、文章完成法、略画完成法、被験者連想ネットワーク法などを取り上げてそれぞれの手法を比較した。
- 7) 古矢千雪. 「図形刺激による自由連想についての研究 (1)」『広島文化女子短期大学紀要』. 広島文化女子短期大学, 10巻, 1977. <http://harp.lib.hiroshima-u.ac.jp/hbg/metadata/11425> (閲覧日: 2022.1.11)
- 8) 富田俊明. 「分析的視覚化としてのドローイング: 専門家養成から小学校教員養成の現場へ」『北海道教育大学紀要教育科学編』. 北海道教育大学, 10巻, 1号, 2011. <http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/bitstream/123456789/2423/1/62-1-kyoiku-05.pdf> (閲覧日: 2022.1.11)
- 9) 東京都現代美術館. 『ドローイングの可能性』, 展覧会ハンドアウト. <https://www.mot-art-museum.jp/exhibitions/the-potentiality-of-drawing/> (閲覧日: 2022.1.11)
- 10) ティム・インゴルド, 訳 金子遊, 水野友美子, 小林耕二. 『メイキング』. 左右社, 2017, p.268. ティム・インゴルドは、何かを詳記することなどを主目的にした「語らないドローイング」と、思考やそのプロセス、または作家の身体性をも伝える「語るドローイング」とを区別した。後者を「心に浮かんだものを目に見える形に写した影ではない。それ(語るドローイング)は思考のプロセスであって、思考の投影ではない」として、その有機性や身体性、完結のしていなさを評価した。本研究における自由連想ドローイングに即して考えると、連想したイメージをきれいに写して作品を完成させようとするドローイングではなく、どのように連想されたのか、その過程を描いたり、作者の身体性が強く表出して意識されたりするようなドローイングが、「語るドローイング」であると思われる。(0)内は筆者による補足

※図 14 は、全て筆者による。

※作品制作と作品についての主観的な記述は、伊崎による。

要 旨

20 世紀初頭、シュルレアリズムの作家たちは、無意識を手がかりにして新しい芸術表現を求めた。本論では「自由連想法」とドローイングについて参照しながら、自身が撮影した写真から連想されるものを、その写真の上にドローイングする手法を用いて、作者自身の無意識を利用した作品制作を行った。作品制作とそれに対する考察を通じて、本手法における制作上の意義や可能性と問題点を明らかにした。

キーワード: ドローイング, シュルレアリスム, オートマティスム, 写真